

## ダニエル書8章13-14節 「いつまでのことか？」

### 1A 終わりの定めの時

1B 一時、二時、半時

2B 忍んで待つ人

### 2A 束の間の涙

1B 今だけの悲しみ

2B 精錬される信仰

3B 十日間の苦しき

### 3A 涙の後の喜び

1B 患難の後の栄光

2B ぬぐい取られる涙

3B 永久の癒し

## 本文

ダニエル書 8 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、ダニエル書 7 章まで来ました。午後礼拝で 8 章を一節ずつ読んでいきます。今朝は、8 章 13-14 節に注目します。「13 私は、ひとりの聖なる者が語っているのを聞いた。すると、もうひとりの聖なる者が、その語っている者に言った。「常供のささげ物や、あの荒らす者のするそむきの罪、および、聖所と軍勢が踏みにじられるという幻は、いつまでのことだろう。」14 すると彼は答えて言った。「二千三百の夕と朝が過ぎるまで。そのとき聖所はその権利を取り戻す。」」

先週私たちは、ダニエルが四つの獣の幻を見たところを見ました。鷲の翼のついた獅子、熊のような獣、四つの頭と四つの角のある豹、そして鉄の牙を持ち十の角を持つ、おぞましい獣でした。それぞれが、バビロン、メディア・ペルシヤ、ギリシヤ、ローマを指し示していました。そしてローマを表す第四の獣の角の間から、小さな角が出て来ました。そこには人間の目があり、大きなことを語る口がありました。その角は次第に大きくなり、他の三本の角を倒します。しかし、人の子であるキリストが天の雲に乗って、この獣を滅ぼされます。そして永遠の神の国を立ててくださいます。

そして 8 章においては、再び獣の幻があります。雄羊と雄山羊の幻です。雄羊に対して雄山羊が怒り猛り、雄羊を倒します。雄羊はメディア・ペルシヤで、雄山羊がギリシヤです。ギリシヤの雄羊から大きな角が出ていますが、高ぶった時にそれが折れてしまいました。けれども、四本の角がその大きな一本の角が折れた後で出て来ます。これが、ギリシヤ帝国です。アレキサンダーが当時知られていた世界を征服して、早く死んでしまいました。後継者を立てることもなく死んだので、四人の総督が権力の争いをして、その領土を四分割しました。

そして、その一つシリヤのセレウコス朝から、一人の王、卑劣で狡猾な王が出て来ます。アンティオコス・エピファネスという王です。彼こそが、終わりの日に現れる反キリストを予め示すような男として、ダニエル書に登場しています。彼の行なった最も邪悪なことの 하나가、ユダヤ人たちを徹底的に迫害し、彼らの信仰と礼拝を汚し、神殿を荒らすことでした。彼は、「荒らす忌むべき者」と呼ばれます。そして終わりの日に出て来る反キリストも、荒らす忌むべき者と呼ばれます。そして、アンティオコス・エピファネスが神殿を荒らし、その神への礼拝を異教、偶像のものに取り替えていくような、「あの荒らす者のするそむきの罪」は、いつまでなのだろうか？と、ここで一人の聖なる者、天使が尋ねています。そしてもう一人の聖なる者が答えています。「**二千三百の夕と朝が過ぎるまで。そのとき聖所はその権利を取り戻す。**」言い換えると、2300 日という期限付きだということです。このような恐ろしいことは、いつまでも続かない。神が終えると、定めているのだということです。

### 1A 終わりの定めの時

御使いがダニエルに続けて、「それは、終わりの定めの時にかかわるからだ。(19 節)」と言っています。神が定めておられる期間があり、苦しみはいつまでも続かないということです。私たちは苦しみの中にいる時には、とても辛くなります。それがいつまでも続くという思いが必ずきます。主は、「束の間にしかすぎない」とお答えになっておられます。詩篇 30 篇で、「御怒りはつかの間、いのちは恩寵のうちにある。(30:5)」とありました。

### 1B 一時、二時、半時

そこで、ダニエル書にある定められた期間を読むのは、とても意味あることです。7 章には、獣が聖徒たちに戦いを挑んで、聖徒たちに打ち勝ったという箇所がありました。聖徒たちに、とてつもない迫害を行ない、世界を荒廃へと向かわしめます。「7:25 彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。」けれども続けて、「7:26 しかし、さばきが行なわれ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。」一時、二時、半時です。時が一年なので、三年半のことです。聖徒たちが反キリストの思うままにされるのが、三年半の期間だということです。しかし、裏を返せば、三年半だけなのだという励ましなのです。黙示録 20 章には、患難時代に獣に殺された聖徒たちが復活することが書かれています。そして、既にキリストと共にいる教会と共に、彼らも千年間、キリストと共に世界を統べ治めることが書かれています。考えてみてください、千年間と三年半であります。私たちにとっては、三年半は長く感じるかもしれませんが、千年という至福の時と比べれば、光陰矢の如しです、ほんの僅かな、一瞬のような期間です。

### 2B 忍んで待つ人

主は、ダニエルに対して、これから恐ろしい苦難が来ることを語られながらも、それによってかなり力を失ってしまったダニエルに対して、励ましておられます。12 章において、ハルマゲドンの戦いの啓示を与えられた後に、やはり、ダニエルは、「この不思議なことは、いつになったら終わるの

ですか。(6 節)」と尋ねました。そしたら、御使いが天に手を向けて誓いました。「それは、ひと時とふた時と半時である。(12:7)」そして、さらに励ましました。「常供のささげ物が取り除かれ、荒らす忌むべきものが据えられる時から千二百九十日がある。幸いなことよ。忍んで待ち、千三百三十五日に達する者は。(12:11-12)」一時、二時、半時よりさらに 30 日多い 1260 日、そしてさらに 45 日多い 1335 日です。その 30 日の間に、また 45 日の間に何があるのかは、はっきりと啓示されていませんが、大事なのは、1260 日なのだよ、そして 1335 日まで耐え忍んで待ちなさい、耐え忍ぶ者は幸いなのだと言っていることです。

終わる時が定まっているのなら、待てます。耐え忍ぶ力が与えられます。主は、預言者ハバククにも同じように言われました。「2:3 この幻は、なお、定めのためである。それは終わりについて告げ、まやかしを言ってはいない。もしおそくなくても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。」私たちには、定めの時があるのだという望みがあれば、その望みによって救われるのです。ある心理学者のネズミによる実験がありました。彼は、ネズミを水の中に入れて、どれだけ泳いでいられるかを実験しました。15 分ぐらいで溺れ死んだそうです。けれども、次に 15 分ぐらい経って、今にも溺れそうになった時に救い出しました。そして乾かしてあげ、少しご飯もあげました。それでまた水の中に入れました。すると、なんと 60 時間泳ぎ続けることができたとのことです。<sup>1</sup> 私たちは、これは終わるのだという望みがあるので、その希望が私たちを生かすのです。そして、忍耐して待ちます。ヤコブは、ヨブのことを話しました。「ヤコブ 5:10-11 苦難と忍耐については、兄弟たち、主の御名によって語った預言者たちを模範にきなさい。見なさい。耐え忍んだ人たちは幸いであると、私たちは考えます。あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いています。また、主が彼になさったことの結末を見たのです。主は慈愛に富み、あわれみに満ちておられる方だということです。」耐え忍ぶことは、主が願われている私たちの姿勢です。

## **2A 東の間の涙**

ですから、私たちは悲しむのですが、その悲しみは東の間であることを知る必要がありますね。悲しみが喜びに変えられます。

### **1B 今だけの悲しみ**

私たちの悲しみは、喜びがその後に来るものだとして深く信じて悲しむということを知る必要があるでしょう。それは、イエス様の十字架と復活に基づいています。「ヨハネ 16:20-22 まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたは泣き、嘆き悲しむが、世は喜ぶのです。あなたがたは悲しむが、しかし、あなたがたの悲しみは喜びに変わります。女が子を産むときには、その時が来たので苦しみます。しかし、子を産んでしまうと、ひとりの人が世に生まれた喜びのために、もはやその激しい苦痛を忘れてしまいます。あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜び

<sup>1</sup> <http://plasticarmy.com/notes/a-little-pool-of-water-called-hope/>

をあなたがたから奪い去る者はありません。」私たちのイエス様が十字架に付けられるということは、とても悲しいことです。ペテロが、「そんなことがあってはいけません。」と言いましたが、人間的には尤もです。そんな悲しいことが起こってはなりません。しかし、十字架の上でイエス様が罪と病を背負ってくださるという悲しみがあって、それで初めて、喜び、しかも真の喜び、永続する喜びが湧き出ます。

私たちに虫歯があって、その虫歯があっても大丈夫だ、悲しむことはないと言われたらいかがでしょうか？虫歯を削る、あるいは抜歯する、そういった悲しみが重要です。けれども、治療した後、これまで苦しんでいた痛みは取り除かれます。そこには、痛みと苦しみから解放された、本当の喜びがありますね。私たちの喜びは、そういった悲しみに裏打ちされた喜びです。「2コリント 7:10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

## 2B 精錬される信仰

そして、私たちの悲しみは、その悲しみの中で信仰が清められていきます。「1ペテロ 1:6-7 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精錬されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称赞と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」信仰の試練が来ます。私たちがイエス様を信じたら、全てが良くなるということは決してありません。信仰を持っていない人と変わらないことが起こり得ますし、信仰を持っているからかえって受ける試練もあります。そうであれば、信仰を持っていて人生損をする！ということになってしまいます。けれども、信仰を持っていることの幸いは、もっと自分の内実、人格や品性に関わることです。試練を通った人は、その信仰が火で精錬された金のように、いやそれ以上に貴くなるのだということです。

そして、ここでもその試練が、「しばらくの間」と断り書きをしています。束の間の試練、束の間の悲しみです。そして、そのしばらくの間の悲しみが、最後には、称赞、光栄、栄誉に至るものになるのだということです。

## 3B 十日間の苦しみ

イエス様は、迫害を受けているスミルナの教会に対しても、一時的な苦しみについて教えておられます。「黙示 2:10 あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。」迫害の背後には、悪魔がいます。キリスト者というだけで、憎しみ、迫害をするその心の背後には、いわれなきもの、悪魔としか言えないものがあります。しかし、主は決して

それをずっとそのままにされることはありません。悪魔による迫害を主は掌握しておられます。「十日の間苦しみを受ける」とあります。十日という試される期間です。泣いても笑っても十日だ、ということ。その苦しみが終わるのは近いのだ、ということです。そして、驚くべきことは死に至るまでの苦しみであるのですが、それを通り過ぎると「いのち」があります。いのちの冠をいただくことができます。

### **3A 涙の後の喜び**

#### **1B 患難の後の栄光**

ですから、私たちは真実な喜び、永続する喜び、言葉に言い尽くすことのできない、踊りそうになるほどの喜びを得るために、一時与えられる苦しみを、喜びをもって甘受することができます。「ローマ 5:2-5 またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいますが、そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

私たちは、恵みによって神を信じ、神に近づくようにされました。そして、恵みによって神に近づくということで、神の前に出ていくことができ、神の栄光を見て、大いに喜ぶことができます。神の栄光を見て喜ぶなど、罪ある者には決してできず、聖なる神の前では誰もが焼き尽くされ、殺されてしまいます。しかし、キリストの流された血、甦りによって私たちは大胆に、神の前に行けるのです。

私たちキリスト者は、信仰を持った時からこの喜びに預かっています。パウロが、「神の栄光を望んで大いに喜んでいますが」と言っています。信仰を持った人々が、賛美の中で喜んでいながら、神の栄光を見て喜んでいられるのだと思います。けれども、それだけで終わりません。主を仰ぎ見て喜ぶだけでなく、患難さえも喜ぶのだと言うのです。私たちは、悲しいことを悲しんでいけない、ということを行っているわけではありません。悲しいものは悲しいのです。しかし、その苦しみの中で次のことが起こるので、なおのこと自分の中に熱いもの、喜びが出てくるのです。それは、忍耐を生み出します。そして忍耐は、練られた品性を生み出します。信仰を働かせて忍耐している時に、主が御霊によって私たちの深いところで品性を培うようにしてくださるということです。それから、練られた品性から次に希望が与えられます。そしてその希望は失望に終わらず、聖霊によって神の愛が心に注がれるのです。

そう、これを言い換えれば、「イエス様を人格的に知る」ということでしょうか。私たちの喜びは、イエス様ご自身が私たちの内で形造られていくことです。主に内側から似た者になっていくということです。忍耐も、練られた品性も、そして希望も。そして愛というものが、聖霊によって注がれていくので、信仰をもった初めから聞いている「愛」という言葉が、どれだけのものであるかを知るよ

うになっていきます。これは、すぐに得られるものではありません。信仰生活を歩む中で、苦しみも受ける中で、神の愛にますます満たされるのです。

### 2B ぬぐい取られる涙

そして、私たちが知らなければいけないのは、涙があっても、その涙を拭ってくれる喜びが次に来ます。「詩篇 126:5-6 涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る。」喜びに変わるので、涙は取り去られます。主が最後に私たちに用意されているのは、涙を過ぎ去らせることです。「ヨハネの黙示 21:3-4 見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」涙が拭い取られます。なぜなら、死がなくなるからです。罪の報酬が死ですが、罪そのものが取り除かれるので、死ものぞかれます。ゆえに、悲しみも、叫びも、苦しみも過ぎ去ります。この都に、私たちは恵みによって入ることができるようにしてくださいました。

### 3B 永久の癒し

そして、私たちは一時の悲しみに対して、永遠の癒しをもって神は私たちに臨んでくださいます。「黙示 22:1-2 御使いはまた、私に水晶のように光るいのちの水の川を見せた。それは神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民をいやした。」いやした、と書かれています。いやし続けられていたという言い回しになっています。いつまでも、生ける水の川によって、その葉によって癒しを受け続けます。私たちの痛み、私たちの叫び、私たちの悲しみ、これらのものが、永遠に全て忘れ去られ、癒され、平安が与えられ、そこにある喜びと慰めが永遠に続くのです。

ですから、ダニエルが驚きすくみ、体さえも倒れそうになったほどの人々に対する迫害、苦しみは、一時的なものです。束の間です。その間にも、主が共におられて、全てのことを働かせて益としてくださいる神のご計画があります。